

## プロセスレコードを用いたリフレクションの意義を考える —臨床経験のある看護師のリフレクション時の気づきの分析から—

春田陽子<sup>1,2)</sup>、金子美千代<sup>1,3)</sup>、小玉博子<sup>4)</sup>、有村優子<sup>5)</sup>、野中弘美<sup>5)</sup>、稲留直子<sup>6)</sup>、丹羽さよ子<sup>6)</sup>

### 要旨

〔目的〕本研究では、臨床経験のある看護師のリフレクション時の気づきを分析し、プロセスレコードを用いたリフレクションの意義を検討した。〔方法〕臨床経験のある看護師1名を対象にリフレクションの過程で対象が発した言葉を質的帰納的に分析した。〔結果〕4つのカテゴリ【看護のプロセスを想起、リフレクションすることへの苦手感】【医療者主体に偏った支援】【自己の対人認知への課題】【プロセスレコードによる振り返りで気づいた自己の特徴と認識の変化】が抽出された。〔結論〕1. 臨床で働くうちに半ば無意識のうちに進行してきた看護者としての規範の内面化という過程を意識化する契機になり得る。2. 看護者としての自己の成長と同時に、看護実践を医療者主体から患者（生活者）主体へと軌道修正をもたらし、看護実践能力の発展を促す可能性がある。3. 自身の看護実践と看護者としての自己についての自己点検、自己評価、自己修正の好機となり得る。

キーワード：臨床経験のある看護師、卒後教育、プロセスレコード、リフレクション

### 緒言

わが国における、少子高齢化の進展による人口構造の変化と、近年の経済状況は、保健・医療・福祉にも大きな影響を及ぼしている<sup>1)</sup>。入院期間の短縮、在宅医療への移行が推進され、医療ならびに看護を取り巻く環境は著しく変化している。このような状況の中で、看護に対する社会のニーズも多様化しており、病院から暮らしの場で医療・看護をつなぐ教育を充実させて、看護師の専門性を強化していくことが求められている。

我々は、2015年から2019年までの5年間、文部科学省課題解決型高度人材養成プログラムの採択事業として「地域での暮らしを最期まで支える人材養成－離島・へき地をフィールドとした教育プログラム－」（以下、島

嶼・地域ナース育成プログラム）に取り組んできた（図1）。地域の人々が住み慣れた場所で、最期までその人らしく生きることを支援できる看護職の育成を目指すプログラムである。受講対象は、本学看護学専攻4年生から新卒3年まで履修する「ベーシックコース」と、臨床経験3年以上の看護職が現在の職場で働きながら履修する「アドバンスコース」とした。

斎藤ら<sup>2)</sup>は、臨床での経験を積んだ看護師の実践能力の実態について「医学的知識に偏りデータや治療効果に焦点化された見方が強い傾向があり、その人らしく個別的な生活を送る社会的個人としてのありようを捉えるための生活体の側面の把握は個人の資質に委ねられている。患者の生活への配慮を欠く医療を看護者がつくり出す可

<sup>1)</sup> 元鹿児島大学医学部島嶼・地域ナース育成センター

<sup>2)</sup> 訪問看護ステーションみすづ

<sup>3)</sup> 宮崎県立看護大学

<sup>4)</sup> 公益社団法人鹿児島県済会南風病院看護部

<sup>5)</sup> 鹿児島国際大学

<sup>6)</sup> 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻

連絡先：丹羽さよ子

鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/Fax: 099-275-6751

E-mail: n-sayo@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

能性がある」と述べている。医療施設は病気を治すことを主眼としているため、臨床経験が長くなると、患者の生活や人生に寄り添う看護より、医学的思考に偏った看護に陥ってしまうことは容易に推測できる。金子ら<sup>3)</sup>も、臨床での経験をもつ看護師の看護過程展開上の特徴について、自己の価値観で対象を理解している、対象の言動の本当の意味を理解できない、医学的思考に偏った看護を展開している、対象の尊厳を尊重しない看護を展開している、対人的援助関係がうまく築けないなどを明らかにしている。本教育プログラムでは、「対象の思いや状況を対象の立場に立って想像する力」「対象の思いや状況を尊重しながら看護を展開する力」が不可欠な能力であると考え、これらの能力を鍛えるための教育方法としてプロセスレコードを用いたリフレクションを活用した。また、看護の実践的思考能力を向上させるための一つの方法としてリフレクション<sup>4)</sup>が注目され、看護教育等で活用されている。プロセスレコードは、対象と看護師の相互関係を振り返り、「患者の言動を読み取る」「知覚された患者の言動から看護者に生じる思考・感情の妥当性を確かめる」「看護者の言動が他者に与えた影響を振り返る」ことを目的<sup>5)</sup>として看護教育等で利用されている。したがって、プロセスレコードを用いたリフレクションにより、「住み慣れた場所で最期までその人らしく生きることを支援する」ために必要な能力を育成することを目指した。

そこで、本研究では、臨床での経験をもつ看護師を対象に、プロセスレコードを用いたリフレクションでの気づきの分析を通して、プロセスレコードを用いたリフレクションの意義を検討することを目的とした。

## 用語の定義

### 1. リフレクション

経験により引き起こされた気にかかる事柄に対する内的な吟味および探求の過程であり、それら経験の自分自身に対する意味づけをしたり、そこに内在されている看護実践の意味を明らかにしたりするものであり、結果として自分自身の見方や考え方に変化をもたらすことである<sup>6)</sup>。

### 2. プロセスレコード

看護過程分析表のことであり、患者と看護師の相互作用過程を明らかにするために看護場面を再構成し、看護者の知覚した状況、看護者の認識、看護者の行動を時系列で記述し、今後のケアに役立たせるために活用されている記録<sup>3,7)</sup>である。

## 研究方法

### 1. 研究デザイン

事例研究

### 2. 研究対象

本教育プログラムのアドバンスコース（履修3年目）12名のうち、1名を対象とし、リフレクションの過程で得られた気づきについて具体的な事例として対象を選定した。

### 3. 調査期間：2017年4月下旬

### 4. 本教育プログラムの概要

図1に本教育プログラムの概要について示す。「離島・へき地をフィールドとした教育」によって、地域での暮らしを最期まで支えることができる人材を育成することである。図2に示すように、対象の“その人らしさ”を大切にする視点を核とした教育カリキュラムで構成されている。

#### 1) リフレクションの実施方法

本教育プログラムを受講している学生（以下、履修生）は、就業しながら受講するため、タイムリーに個別面談を実施できるように Information and Communication Technology（以下、ICT とする）を活用して、リフレクションを実施した。個別面談は、実習前の事前面談、実習後の振り返り面談を行い、各実習で学びを積み上げていく学習システムになっている。事前面談では、履修生自身の能動的な学びを促すために、履修生の能力・ニーズに合わせた課題と目標を明確にするように促した。実習後の振り返り面談では、実習で経験した事例や出来事の振り返りを通して、自分自身の気づきを促しながら学びを深められるように支援した。すなわち、実習での経験の再構築を促すためのリフレクションを行った。

実習は、以下の4つの実習(1)～(4)を段階的に行った。実習(2)～(4)では、履修生自身がその日に印象に残った看護場面について起こしたプロセスレコードを用いてリフレクションを行った。なお、3日間の実習中に、1日1場面のプロセスレコードを提出している。

(1) 離島・へき地フィールドワーク実習（実習期間4日間）

本実習は、対象を生活者として捉える能力を鍛えるためのものであり、本教育プログラムの最初の実習である。

(2) 実務研修プレステップ（実習期間3日間）

本実習は、訪問看護師のシャドーイングにより在宅看護過程を追体験する実習である。シャドーイング用のプ

## 地域での暮らしを最期まで支える人材養成－離島・へき地をフィールドとした教育プログラム－

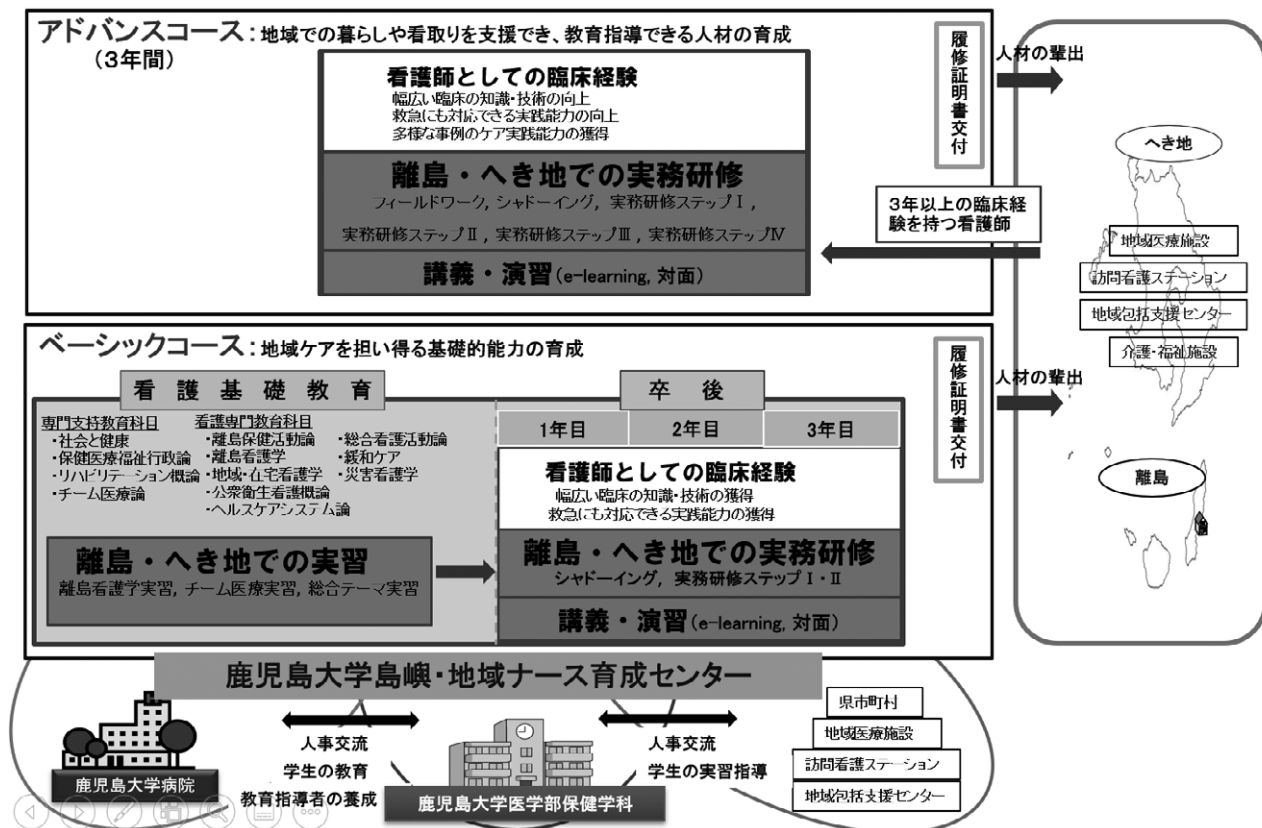


図1 離島・へき地をフィールドとした教育プログラムの全体像

## 「その人らしさを尊重する視点」を核とした教育カリキュラム

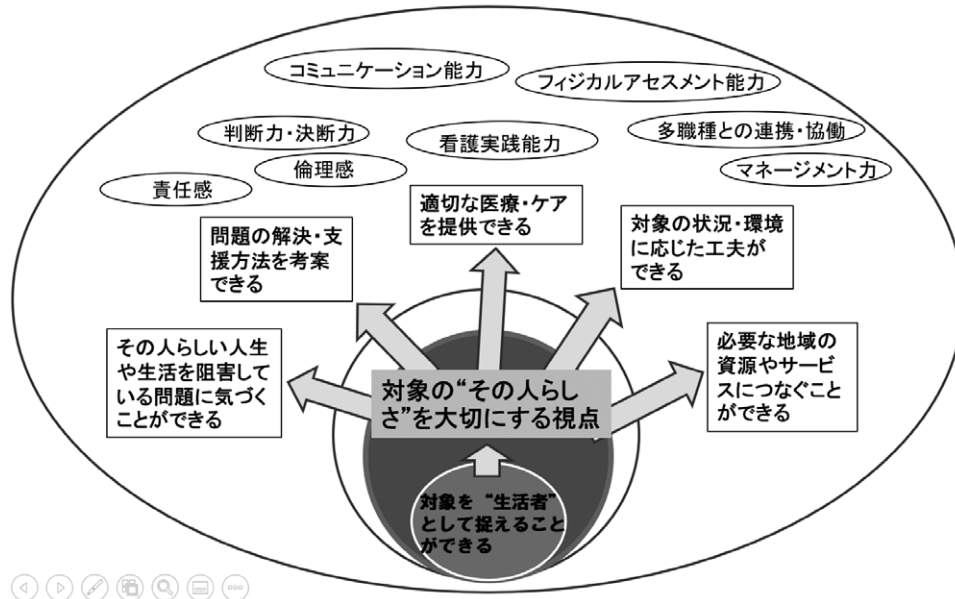


図2 その人らしさを尊重する視点を核とした教育プログラム

ロセスレコードを使って、履修生自身が在宅看護過程を展開できるための基礎的な能力を習得させるためのものである。

### (3) 実務研修ステップⅠ（実習期間3日間）

本実習は、ケアマネジャーとの同行訪問により、対象の望む生活を実現するために多職種と協働する能力の基礎を身につけるためのものである。

### (4) 実務研修ステップⅡ～Ⅳ（実習期間各3日間）

本実習は、対象の暮らしや価値観・思いを尊重しながら必要な看護を提供する実践的な在宅看護過程の展開能力を訓練するものである。本実習の場所・内容は、履修生の課題に応じて設定した。

## 5. 調査内容

本研究では、実務研修ステップⅡの実習後の個別面談で、履修生のプロセスレコードを用いてリフレクションを行った。提出されたプロセスレコードのなかに「履修生がどう感じ、どう考えて、どう行動したのか」に空白部分があるなど、再構成した看護場面に対する履修生自身による振り返りだけでは不十分であり、指導教員とのリフレクションによって学習を深めることができると判断した場面を選定した。研究者がそのリフレクションの過程で履修生が発した気づきに関する言葉を記述していた記録を分析データとした。

## 6. 分析方法

本研究は、質的記述的研究の手法を用いて分析を行った。研究者が記録していた内容から、リフレクションでの気づきと考えられるデータを抽出し、要約したものをコードとした。そして、意味内容の共通するコードを集めてサブカテゴリとした。さらに、サブカテゴリ同士を比較して、共通するものを集約してカテゴリとした。分析の妥当性を確保するために、分析の過程では、質的研究経験のある研究者3名にスーパーバイズを受けた。

## 7. 倫理的配慮

本研究を行うにあたり、研究対象者には、研究の目的・内容について研究への参加の自由と拒否による不利はないこと、個人情報保護について口頭で説明し同意を得た。また、本研究に使用したデータは個人が特定されないように匿名化した。なお、本研究は本学疫学研究等倫理委員会が承認を得て実施した（受付番号：170383(333) 疫 - 改2）。

## 結果

### 1. 研究参加者の概要

研究参加者は、アドバンスコースを履修した看護師1

名である。年齢は50代、性別は女性、看護師経験年数13年（病院勤務10年、訪問看護ステーション3年）であった。現在の勤務先は、訪問看護ステーションに管理者として勤務している。

## 2. リフレクションの実際

リフレクションの実施時間は1回1時間程度であった。研究者が指導教員としてリフレクションを実施した。研究者は、臨床経験9年、看護教員経験年数2年目である。リフレクションでは、履修生が自身の体験を振り返り、自ら気づき学ぶことができるような発問や示唆を与えた。プロセスレコードおよびリフレクションについては、事前に他の教員との勉強会などで学んだ上でリフレクションを行った。

### 1) リフレクションに用いたプロセスレコードの記述内容

履修生が記述したプロセスレコードを表1に示す。履修生は、訪問看護師と同行訪問し、Aさんとの関わりや行われるケアを見学後に、Aさんとコミュニケーションを行った。履修生は、Aさんは電動ベッドのリモコン操作や携帯電話をかけられるのに自分では痰吸引できないのか、ヘルパーさんにでも吸引してもらえないのか疑問に感じ、Aさんへ関わった場面である。履修生は①「いま困っていることは何ですか。」と質問し、Aさんは②「今の時期は痰が多いこと。」と答えた。履修生は、③自分であるいはヘルパーさんにでも援助してもらえば痰量が多い時期には楽になると思い、④「自分では吸引されないのですか。」と質問したが、Aさんは⑤「手が動かないからできない。」と答えた。それに対し、履修生は、⑥「しまった。上肢は動くが指先でする細かい動作ができない。握力がなかったのだ」と思った。しかし、その後のプロセスレコードでは、履修生がどう感じ、どう考えて、どう行動したのかが空白となっており、Aさんが⑦「キャップを外せないよね。外しやすいように大きくすればいいかもね。」と冗談交じりで話していたことが記述されていた。

### 2) 実習後のリフレクションの概要

指導教員は、履修生の起こしたプロセスレコードに記載されている、『痰の量が多いことに困っているAさんに対し、履修生は「自分で吸引されないのですか」と質問し、「手が動かないからできないよ」とのAさんの答え（プロセスレコード③④）に対し、履修生はどう感じ、どう考えていたのか、その後の行動が空白になっていた場面（プロセスレコード⑦' ⑧'）』に注目し、主に「プロセスレコードに起こした場面はどういう状況だったか

表1 履修生のプロセスレコード

場面の説明	訪問看護師が気管切開部からの吸引後、痰が多いときは電話をくださいと言われた場面		
問題提起	電動ベッドのリモコン操作や携帯電話をかけられるのに自分では痰吸引はされないのかなと思った。		
対象(A)の言動・状況	私(B)はどう感じ、どう考えたか	私(B)はどう行動したか	第三者としてAとBとの関わりを見つめ直した時、どんなことがわかるか
<p>②今の時期は痰が多いこと。</p> <p>⑤手が動かないからできないよと、すぐに否定されるが、表情は嫌な感じではない。</p> <p>⑦キャップを外せないよね。外しやすいように大きくすればいいかもね。と冗談交じりで答えられる。</p>	<p>③自分であるいはヘルパーでも援助してもらえば痰量が多い時期には楽になるのに。</p> <p>⑥しまった、上肢は動くが指先でする細かい動作ができない、握力がないのだった。</p> <p>⑧'</p>	<p>①今困っていることは何ですか。</p> <p>④自分で吸引はされないのですか。</p> <p>⑦'</p>	<p>タイムリーに吸引出来たらよいと思ったことが、すぐに言葉に出てしまった。Aさんが気分を害されなかったのに救われた。以前にたん吸引の話題が出たのかもしれない。</p>
<p>自己洞察したこと</p> <p>痰吸引をタイムリーにできないことは不安があるが、ヘルパーの援助をもらい自分で吸引をするよりも看護師にしてもらった方が安心すると感じている。</p>			
<p>本看護過程全体を振り返ってわかること</p> <p>看護師が訪問する時間は限られるし、痰量が多いときは頻回の吸引が必要となってくる。ヘルパーが1日4回訪問しているのであればヘルパーもたん吸引ができれば楽に過ごせるようになると考える。ヘルパー指導が課題になると思う。</p>			

(履修生がAさんのどこに着目し、それらにどう反応していたのか)」と「自分自身の反応の仕方の特徴や対象の言動を受けて自分自身の背景になっている考え方」に焦点をあててリフレクションを行った。

### 3. 実習後のリフレクションでの履修生の発言内容の分析結果

プロセスレコードによるリフレクションでどのような気づきを得たのか分析した結果、22個のコード、8個のサブカテゴリ、4個のカテゴリが抽出された(表2)。以下、カテゴリを【 】、サブカテゴリを《 》、コードを〈 〉、記述内容を「 」で示す。

1)【看護のプロセスを想起、リフレクションすることへの苦手感】は、《対象の言動を受けて考え行動するプロセスが苦手》《プロセスを想起して記述することへの苦手感と苦痛感》のサブカテゴリから成り立っていた。

このカテゴリは、履修生がAさんに自己吸引について提案したときに、「しまった。上肢は動くが指先でする細かい動作ができない。握力がないのだった。」と戸

惑いを感じ、「対象の言動・状況をどう感じ、どう考えたのか」がプロセスレコードの中で抜け落ちていた。」ので、面談時に振り返りをしてもらった。しかし、そのときの考えを想起することが難しく、Aさんとのやりとりにも行き詰まりを感じていた。また、「カンファレンスでプロセスレコードを使ってリフレクションすることが苦痛だった。」と《プロセスを想起して記述することへの苦手感と苦痛感》があり、自己の考え方や感情を記述・表現できないでいた。《対象の言動を受けて考え行動するプロセスが苦手》という看護を丁寧な文脈におこして振り返ることを苦手としていたという気づきを示す。

2)【医療者主体に偏った支援】は、《医療者としての価値観が先行してしまう傾向》《医療者側から捉えた問題点を共有しようという関わり》のサブカテゴリから成り立っていた。

このカテゴリは、履修生が、対象者の困りごとに対して〈対象の苦痛を緩和するために自己吸引を提案しようという関わり〉〈ヘルパーも吸引できたら対象が楽に過ごせる〉〈看護師の訪問だけでは支援が不十分という捉

表2 プロセスレコードを用いたリフレクションでの気づき

カテゴリ	サブカテゴリ	コード	記述データ
看護のプロセスを想起，リフレクションすることへの苦手感	対象の言動を受けて考え行動するプロセスが苦手	対象の言動・状況をどう感じ，どう考えたというプロセスが抜けおちてしまうという気づき	対象の言動・状況をどう感じ，どう考えたのかがプロセスレコードの中で抜け落ちていた
		対象の言動をどう受け止めたのかという援助関係のプロセスが抜けおちてしまうという気づき	対象の言動をどう受け止めたか，そしてどう行動すべきかという援助関係の重要なプロセスが抜け落ちてしまうという課題がみえてきた
	プロセスを想起して記述することへの苦痛感と苦手感	プロセスレコードを用いてリフレクションすることへの苦痛感	カンファレンスでプロセスレコードを使ってリフレクションすることが苦痛だった
		プロセスのどの場面を取り上げていいか難しい	プロセスレコードでどの場面をとりあげていいのが難しかった
医療者主体に偏った支援	医療者としての価値観が先行してしまう傾向	医療者としてよいと思ったことがすぐに言葉として出てしまう	履修生は，タイムリーに吸引出来たらよいと思ったことがすぐに言葉として出てしまっていた
		自分の関心が先走る傾向	履修生の関わりの特徴として，自分の関心や考えが先走る
		短絡的ですぐに結果に結びつけてしまう陥りやすい傾向	自分の陥りやすい傾向は，短絡的ですぐ結果に結びつけてしまう
		対象の生活背景や吸引に対する思いを知らずにすぐに自己吸引がいいだろうと提案	今までの生活背景や吸引に対して思いを知らず知らずにただ自己吸引がいいだろうと提案することは，もしかしたら対象は気分を害されたのかもしれない
	医療者側から捉えた問題点を共有しようという関わり	ヘルパーも吸引ができれば対象が楽に過ごせる	看護師が訪問する時間は限られるし，喀痰量が多いときは頻回の吸引が必要となってくる
		喀たん吸引についてヘルパーの指導が課題になる	ヘルパーが1日4回訪問しているのであればヘルパーも喀痰吸引ができれば楽に過ごせるようになると思う
		看護師の訪問だけでは支援が不十分という捉え方	場面の再構成では，看護師が訪問する時間は限られるし，痰量が多いときは頻回の吸引が必要となってくる
		対象の苦痛を緩和するために自己吸引を提案しようという関わり	履修生は，自己吸引ができれば苦痛を緩和できるだろうと提案しようと思図的に関わってみた
自己の対人認知への課題	対象がこれまで努力してきたことを疎かにせず理解を示す必要性	限られた状況の中で対象が最大限努力してきた背景を知る必要性	対象の背景や今までの自己吸引に至らなかった思いを知ることができたのかもしれない
		対象の言動の裏の思いを知ろうという関りが疎かになりやすいという気づき	対象の言動の裏に潜む対象の認識や気持ちを知ろうという丁寧な関りが疎かになっているという特徴がみえる。
	対象の立場で対象の思いを理解しようとする必要性	まずは苦痛に感じている言動を受け止めようとする対象の立場で物事を考える姿勢が必要	対象の立場で物事を考えるという基本的な姿勢があれば，喀痰量が増えて苦痛に感じているという言動をまずは受け止めようとする関わりができたのではないかと。
		看護師に吸引してもらった方が安心するという対象の思い	看護師に吸引してもらった方が安心するという対象の思いもある
		対象が安心して生活できることを考える必要性	どうすれば対象の苦痛が軽減し安心して生活できるかを考える必要があったと振り返ることができる。
		看護師に吸引してもらった方が安心するという対象の思い	看護師に吸引してもらった方が安心するという対象の思いもある
プロセスレコードによる振り返りで気づいた自己の特徴と認識の変化	プロセスレコードで看護を振り返ることの重要性	プロセスレコードで看護を振り返る重要性	履修生は，プロセスレコードを中心に自己の看護を振り返ることは重要であると感じている
		プロセスレコードだからできた振り返り	プロセスレコードがあったから振り返りができたと思う。
	対象を深く理解しようという自己の認識の変化	言葉の裏にどのような意味があるのか対象を深く理解しようという自己認識の変化	自己の課題として，言葉として考えるが，言葉の裏にはどういう意味があるのか，行動とか仕草のなかにどういうものが潜んでいるのかを考えられるようになり，深く理解しようとする自分ができた。
		プロセスレコードによって立ち止まって考えるようになったという気づき	立ち止まって言葉や考えをまとめたり，分析する訓練になった。
	対象の言動に医療者がどう反応するかによって，その後の展開が異なることへの再認識	対象の言動に医療者がどう反応するかによって，その後の展開が異なることへの再認識	対象の言動にどう反応(行動)するかによってその後の展開が異なるかもしれないことを再認識できた場面であった。

え方」となり、すぐに問題を認識していた。しかし、これは《医療者側から捉えた問題点を共有しようという関わり》となっており、〈医療者としてよいと思ったことがすぐに言葉として出てしまう〉ことで、〈対象の生活背景や吸引に対する思いを知らずにすぐに自己吸引がいいだろうと提案〉という無意識のうちに対処し、《医療者としての価値観が先行してしまう傾向》があったという気づきを示す。

3)【自己の対人認知への課題】は、《対象がこれまで努力してきたことを疎かにせず理解を示す必要性》《対象の立場で対象の思いを理解しようとする必要性》のサブカテゴリで成り立っていた。

このカテゴリは、「対象の立場で物事を考えるという基本的な姿勢があれば、喀痰量が増えて苦痛に感じているという言動をまずは受け止めようといえることができたのではないか。」と対象の体験に近づけないでいたことへ気づいていた。そして、自己の対人認知や思考、ふるまいの特徴を自己洞察することで《対象がこれまで努力してきたことを疎かにせず理解を示す必要性》があるという自身の課題が明確になったという気づきを示す。

4)【プロセスレコードによる振り返りで気づいた自己の特徴と認識の変化】は、《プロセスレコードで看護を振り返ることの重要性》《対象を深く理解しようという自己認識の変化》のサブカテゴリで成り立っていた。

このカテゴリは、「言葉として考えるが、言葉の裏にはどういう意味があるのか、行動とか仕草の中にどういうものが潜んでいるのかを考えられるようになり、深く理解しようとする自分ができた。」と《対象を深く理解しようという自己認識の変化》があった。そして、「プロセスレコードがあったから振り返りができた」「立ち止まって言葉や考えをまとめ、分析する訓練になった。」と自己理解するための意識的な訓練として《プロセスレコードで看護を振り返る重要性》への気づきを示す。

## 考察

ここでは、島嶼・地域ナース育成プログラムの教育プログラムで実施した、プロセスレコードを用いたリフレクションでのひとりの履修生（以下、事例）の気づきの分析を通して、プロセスレコードを用いたリフレクションの意義について考察する。

本事例では、プロセスレコードを用いたリフレクションの際に、「対象の言動・状況をどう感じ、どう考えたのがプロセスレコードの中で抜け落ちていた。」ので、面談時に振り返りをしてもらった。その際に、《プロセスを想起して記述することへの苦手感と苦痛感》《対象の言動を受けて考え行動するプロセスが苦手》など【看護のプロセスを想起、リフレクションすることへの苦手

感】に気づいている。看護現場では、その場、その瞬間では、出来事の動きに気をとられ、患者の言葉や行動の意味を考えられずに対応してしまうということが起こっている<sup>5)</sup>。東<sup>8)</sup>も、看護師は“そのときに何を感じ、何を考えたのか”と考える力をもっているが、臨床では一瞬のうちに考えて行為を行っているため、考えることが意識されにくくなっていると述べている。プロセスレコードは、患者と看護者の相互作用（看護実践）の過程を明らかにし、実践に役立たせるために活用されている看護場面を再現する記録である。その相互作用過程を明らかにするために、看護師は看護場面を過程として想起し、「対象をどう知覚」し、「どう感じ・考え」て、「どう行動した」かという要素で再構成することで、看護者自身に生じた思考・感情を意識化・言語化することができ、自分自身の言動が対象にどのように影響したかの検討に有用なツールである<sup>5)</sup>。リフレクションは実践経験から学ぶ思考プロセスである<sup>6)</sup>。したがって、看護教育におけるリフレクションでは、まずは、プロセスレコードに看護場面を再構成させることは重要であると考え

る。本事例において、さらにリフレクションを進めるうちに、〈医療者としてよいと思ったことがすぐに言葉として出てしまう〉、〈対象の生活背景や吸引に対する思いを知らずに自己吸引がいいだろうと提案〉などの《医療者としての価値観が先行してしまう傾向》《医療者側から捉えた問題点を共有しようという関わり》という無意識のうちに【医療者主体に偏った支援】をしていたことに気づいている。そして、さらにリフレクションを進めると、《対象がこれまで努力してきたことを疎かにせず理解を示す必要性》《対象の立場で対象の思いを理解しようとする必要性》という【自己の対人認知への課題】を認識し、「言葉として考えるが、言葉の裏にはどういう意味があるのか、行動とか仕草の中にどういうものが潜んでいるのかを考えられるようになり、より深く理解しようとする自分ができた。」という《対象を深く理解しようという自己認識の変化》と、「プロセスレコードがあったから振り返りができた」「立ち止まって言葉や考えをまとめたり、分析する訓練になった。」と自己理解するための意識的な訓練として《プロセスレコードで看護を振り返る重要性》など【プロセスレコードによる振り返りで気づいた自己の特徴と認識の変化】を感じていた。このように、本事例は、プロセスレコードを用いたリフレクションにより、看護者としての自らの認識の偏向と課題について自覚することができた。

淵本ら<sup>9)</sup>は、臨床の現場では、看護師が日々の実践の中で自分自身の看護を振り返る時間をもつのは難しく、無意識のうちに直感的な判断をしてしまうことが多いと

指摘している。しかし、本事例では、プロセスレコードを用いたリフレクションにより、看護者自身に生じた思考・感情を言語化・意識化し細かく検討することで、臨床で働くうちに半ば無意識のうちに進行してきた看護者としての規範（行動や判断の拠るべき基準）の内面化という過程を意識化させることができていた。宮本<sup>7)</sup>も看護場面の再構成はその契機になると述べている。

次に、本事例がプロセスレコードに再構成した看護場面は、《医療者としての価値観が先行してしまう傾向》と《医療者側から捉えた問題点を共有しようという関わり》という【医療者主体に偏った支援】になってしまい、対象（患者）の真の思いとずれてしまっていて、本事例が戸惑いや行き詰まりを感じていた場面であった。宮本<sup>7)</sup>は、「取り上げるのにもっともふさわしい看護場面は、今一番気になっている看護場面である。なぜならば、そういう場面では自分の知識や技術の限界があらわになっているため、再構成法を用いることを通じて、自己の限界を克服する機会が得られるからである。」と述べており、“気がかり”な看護場面の再構成を通じて、看護者がゆらいだ自己を立て直していく過程からの学びを薦めている。また、尾崎<sup>10)</sup>は、「自己の考え方や感情を直視すると、ゆらぎの感情が生じる。援助者の“ゆらぎ”とは混乱・危機状態であると同時に、多面的な見方、複層的な視野、新たな発見、システムや人の変化・成長を導く契機でもある。」と、“ゆらぎ”は援助者としての学びを促進すると述べている。つまり、看護者自身が気がかりな看護場面についてリフレクションし、自己の考え方や感情を直視することで、看護者として深い学びが得られる可能性があるといえる。一方、看護職は感情労働であるといわれ、ときには自分たちの感情を抑制し、コントロールすることが求められる<sup>11)</sup>。つまり、看護職は自身の感情を無意識に抑え込んでいる可能性が考えられる。しかし、宮本<sup>7)</sup>は、看護師の成長にとって前提となるのは、患者と向かい合った時に看護師自身が体験している感情に注目することで、プロセスレコードは成長を促すための仕掛けだと述べている。

本事例でも、戸惑いや行き詰まりを感じていた場面について、プロセスレコードを用いたリフレクションによって自らの思考過程や対象の捉え方を意識化・言語化させることで、【医療者主体に偏った支援】【自己の対人認知への課題】【プロセスレコードによる振り返りで気づいた自己の特徴と認識の変化】などの、看護者としての自己の成長と、看護実践を医療者主体から対象（患者）主体という看護本来の軸へと軌道修正し、看護専門職として必要な看護実践能力の発展をもたらす“気づき”を得ることができていた。

したがって、リフレクションに気がかりな看護場面を

再構成したプロセスレコードを用いた教育方法は、経験の再構築<sup>8,12)</sup>を促し、看護者としての成長を促すことに有効であると考ええる。

また、斎藤ら<sup>2)</sup>は、医療施設での臨床経験を積んだ看護師の看護実践能力の発展は経験値のみで看護実践を重ねることでは限界があること、そして、経験を積んだ看護師は、他者評価によって実践が是正される機会が少なく、自己点検、自己評価、自己修正が求められると述べている。本事例も職場では管理者であり指導的な立場にある。したがって、本教育プログラムで行ったリフレクションにプロセスレコードを用いた教育方法は、自身の看護実践と看護者としての自己についての自己点検、自己評価、自己修正の好機となり得ると考える。

最後に、本事例がプロセスレコードを用いたリフレクションにより得た気づきをみると、自分の看護実践が【医療者主体に偏った支援】であることと【自己の対人認知への課題】を自覚でき、さらに【プロセスレコードによる振り返りで気づいた自己の特徴と認識の変化】が生じていた。このことから、本教育プログラムで目指した「対象の思いや状況を対象の立場に立って想像する力」「対象の思いや状況を尊重しながら看護を展開する力」の育成に寄与する教育方法であったのではないかと考える。

## 結論

臨床経験をもつ看護師を対象とした気がかりな看護場面を再構成したプロセスレコードのリフレクションでは、【医療者主体に偏った支援】【自己の対人認知への課題】【看護のプロセスを想起、リフレクションすることへの苦手感】【プロセスレコードによる振り返りで気づいた自己の特徴と認識の変化】の気づきがあった。また、気がかりな看護場面のプロセスレコードを用いたリフレクションの意義としては以下が考察できた。

1. 臨床で働くうちに半ば無意識のうちに進行してきた看護者としての規範の内面化という過程を意識化する契機になり得る。2. 看護者としての自己の成長と同時に、看護実践を医療者主体から対象（患者）主体へと軌道修正をもたらし、看護実践能力の発展を促す可能性がある。3. 自身の看護実践と看護者としての自己についての自己点検、自己評価、自己修正の好機となり得る。

## 本研究の限界と今後の課題

本研究は、対象者が1名の事例研究であるので、臨床での経験のある看護師を対象としたプロセスレコードを用いたリフレクションの意義に関する一般可能性には慎重を要する。また、履修生の経験年数や管理者であるといった個人的要因による差異があることも予測される。

リフレクションを促すためには教員の働きかけが重要であるが、どのような指導方法がリフレクションを促進させていたのかが今後の課題である。今後は事例を増やし、今回得られた示唆について更なる分析・検討が必要である。

## 文献

- 1) 公益社団法人日本看護協会：2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョン～いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護～。 <https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/pdf/vision-4C.pdf>, 2015（閲覧日：2021年9月23日）
- 2) 斎藤しのぶ，河部房子，和住淑子：看護理論を組み込んだ教育プログラム受講後の経験を積んだ看護師の看護実践能力の発展．千葉大学看護学部紀要，2008；30：1-9
- 3) 金子美千代，丹羽さよ子，春田陽子，他：「地域での暮らしを最期まで支える人材養成」の課題－履修生の看護過程展開上の特徴からの検討－．鹿児島大学医学部保健学科紀要，2019；29(1)：39-48
- 4) 田村由美：看護実践力を向上する学習ツールとしてのリフレクション．看護教育，2007；48(12)，1078-1082
- 5) 長谷川雅美，白波瀬裕美：自己理解・対象理解を深めるプロセスレコード．第10刷，日総研出版，名古屋，2010
- 6) 田村由美：看護の専門性とリフレクティブな実践．看護実践の科学，2014；39(9)，6-13
- 7) 宮本眞巳：改訂版 看護場面の再構成．第1版，日本看護協会出版，東京，2019
- 8) 東めぐみ：看護のリフレクション入門 経験から学び新たな看護を創造する．初版第6刷，株式会社ライフサポート社，神奈川，2014
- 9) 淵本雅昭，神田直樹：カンファレンスで根付かせる看護倫理 現場導入の仕方．第1版，日総研出版，名古屋，2012，p29
- 10) 尾崎新：「ゆらぐ」ことのできる力－ゆらぎと社会福祉実践．第3刷，誠信書房，東京，2001，11-19
- 11) 武井麻子：感情と看護－人とかかわりを職業とすることの意味．第1版第7刷，医学書院，東京，2004，p42
- 12) 松尾睦：職場が生きる 人が育つ「経験学習」入門，第9刷，ダイヤモンド社，東京，2016，48-65

# **Significance of Reflection Using Process Records —Analyzing Realizations during Reflection in a Nurse with Clinical Experience—**

HARUTA Yoko<sup>1,2)</sup>, KANEKO Michiyo<sup>1,3)</sup>, KODAMA Hiroko<sup>4)</sup>, ARIMURA Yuko<sup>5)</sup>, NONAKA Hiromi<sup>5)</sup>,  
INADOME Naoko<sup>6)</sup>, NIWA Sayoko<sup>6)</sup>

1) Formerly at the Center for the Development of Community Nurses, Kagoshima University Research Center  
for the Pacific Islands

2) Home-visit Nursing Station, Misuzu

3) Miyazaki Prefectural Nursing University

4) Nursing department, Kagoshima Nanpuh Hospital

5) The International university of Kagoshima

6) Course of Nursing, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University

Address correspondence to Sayoko Niwa, E-mail: n-sayo@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

## **Abstract**

**PURPOSE:** To clarify the significance of reflection using process records, a clinical nurse's realizations during reflection were analyzed. **METHODS:** The statements of 1 nurse with clinical experience during reflection were qualitatively and inductively analyzed. **RESULTS:** Four categories, [a sense of difficulty in recalling and reflecting on one's nursing process], [healthcare professional-centered, one-sided support], [one's interpersonal perception-related challenges], and [realizations about one's own characteristics and changes in self-perception after reflection using process records], were identified. **CONCLUSION:** 1) promoting awareness of the normal internalization process one has been semi-consciously proceeding with; 2) helping correct the course by shifting from healthcare professional-centered to patient (resident)-centered nursing practice, while promoting self-growth as part of nursing; and 3) providing a good opportunity for nurses to inspect, evaluate, and correct themselves as a nurse.

**Keywords:** nurse with clinical experience, postgraduate education, process records, reflection